

くらし：家庭

少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ④



運命に翻弄(ほんろう)されるリンダとユリウス(水野英子作『星のたてごと』)

第1回から3回までは、少女マンガが手塚治虫の『リボンの騎士』(1953年)から始まり、70年代以降、池田理代子や秋尾望都といった作家たちが表現の幅を広げていった歴史を紹介した。第4回は、その間の期間である60年代に目を向けたい。

男性作家が描く

50年代の少女マンガは、ほとんど男性作家によって描かれていた。その後、少年マンガで活躍する作家も数多くの少女マンガ作品を発表しているが、それらはいくつかも成人男性によって「読者の少女たちはこういうものを好むだろう」と想像して描かれたものすぎなかった。少女たちが本当に読みたいものとは乖離があったと、当時の編集者も認めている。

このような状況の中で55年に15歳でデビューした水野

『星のたてごと』

英子は、「少女による少女のための少女マンガ」を描いた作家だったのである。60年に発表された『星のたてごと』は、少女マンガに本格的な男女の恋愛を持ち込んだ最初の作品である。ある王国の伯爵の娘で美貌のリンダは、敵国の王子ユリウスと恋に落ちる。敵国に住む者同士が惹かれ合う、という設定は手塚治虫の『リボンの騎士』でもすでに見られる。水野はそこに、さらなる悲劇性と運命性を加えた。それ

は、リンダが人間ではなく神の子で、その神からの「ユリウスの命を奪え」という使命によって地上へと遣わされた女神であるという設定である。

「愛のために命を投げ出せるか」(右)。水野が読者へと突きつけたテーマは、それまでの少女マンガにはない重厚なものだった。2人が互いの身に降りかかった運命を嘆くシーンで、水野は次のように書く。「死、死とはなにかしら、死は音もなくゆめもなく、しんじんとふかいふちにただむさぼる黒い眠り、愛とはなんだろう、もえる太陽

初の本格的恋愛ストーリー

だがこ

で一つ補足したいのは、水野の作品を後押ししたのも男性の編集者であったという点である。『リボンの騎士』の担当編集者でもあった丸山昭氏は、水野の「こうしたい」という思いを否定することなく、周囲の否定的な意見を押し切って自由に描かせてくれたという。卓越した作家の感性をすくい取り、世に発表することも編集者の重要な役割だったのである。

次回は、終、あおいの『星の瞳のシルエット』を取り上げる。



おとなの男女として描かれ、少女たちに「恋愛とは」を問いかけました(水野英子作『星のたてごと』)

日本出版学会理事・大学講師(金曜掲載)